

編集後記

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界中でパンデミック状態となり迎えた新年度の学校教育界は、これまで経験したことのない試練に新たな対応を迫られました。それは、学校や教室といった同じ空間に先生や児童・生徒・学生が集って対面する授業から、感染防止のために3密（密閉・密集・密接）を避ける遠隔授業への方向転換です。これは、偶然にも文部科学省による「教育のICT化に向けた環境整備に係る5か年計画（2018～2022年度）」の中間点に当たり、端末や通信の方法は、各教育機関に委ねられました。

本学では、全国の大学で導入が進んでいるWeb学習基盤システム dotCampus がメインとなりました。対面だと配布資料は紙媒体を印刷することで済むのですが、遠隔では全てが電子媒体となるため、資料の作成に3倍以上の労力を費やしたように感じました。昭和のローテクでアナログな学習形態から平成を経て、令和はコロナ禍によって、ハイテクでデジタルな学習形態が加速するものと思われます。遠隔で対面を補う方法として Zoom を使用する教員もいて、ライブでリアルな遠隔授業を模索する機会となりました。

3密を避ける対策を講じて何回か対面授業も行いましたが、同じ空間にマスクを付けた受講生らが集い、口元の表情が窺えず必要最小限の発話しかできない授業と、たとえ小さな画面であっても、マスクを外して口元の表情が窺える遠隔授業、どちらがよいのだろう、といった迷いも生じました。しかし、学生同士は、久しぶりに対面することによって、たとえマスク越しであっても、互いの目を見、直に言葉を交わすだけで気が晴れる様が窺えました。直接その人の顔を見て会うことこそが「面会」であることを納得しました。

やはり、「教え学ぶ」という営みは、「人類の教師」と呼ばれる先人の時代から対面が基本であり、志を同じくする人間が同じ時間と空間で学ぶことにより、次第に仲間意識や信頼関係は醸成されます。しかし、今回のコロナ禍は生身の肉体を持つ人間にとって脅威であり、感染防止のためには遠隔授業も仕方ありません。現状では対面か遠隔かの二者択一ではなく、対面と遠隔の方式を組み合わせたハイブリッドの授業が理想的だと考えますが、キャンパスに再び、教え学ぶ人々の声が賑わう日々の訪れることを切に願います。

今号は、こども学科3件、スポーツ学科3件、教養教育部1件、人文学部1件、合計8件の投稿がありました。どうぞ高覧ご批評くださいますよう、宜しくお願い申し上げます。

2020年9月吉日

編集委員長

馬場 治

《投稿された論文等に関する著作権は基本的に人間科学部に帰属します》

「金沢星稜大学学会 会則と規程等」については下記WEBサイトの閲覧をお願い致します。

<http://www.seiryu-u.ac.jp/u/education/gakkai/research02.html>

金沢星稜大学人間科学研究 第14巻第1号
(通巻第26号)

令和2年9月28日 印刷
令和2年9月29日 発行

発行 金沢星稜大学学会人間科学部会

〒920-8620 金沢市御所町丑10番地1
TEL (076) 253-3984
FAX (076) 253-3998

印刷所 ソノダ印刷株式会社

〒921-8161 金沢市有松4-3-26
TEL (076) 247-5157

金沢星稜大学学会人間科学部会

部会長 奥田鉄人

編集委員 馬場治(委員長)

金澤愛子 山本智恵子